



「特別の教科 道徳」の教育目標と公開授業の紹介

中川, 雅道

(Citation)

研究紀要 : 神戸大学附属中等 論集, 8(別冊 : 授業実践報告集):93-104

(Issue Date)

2024-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

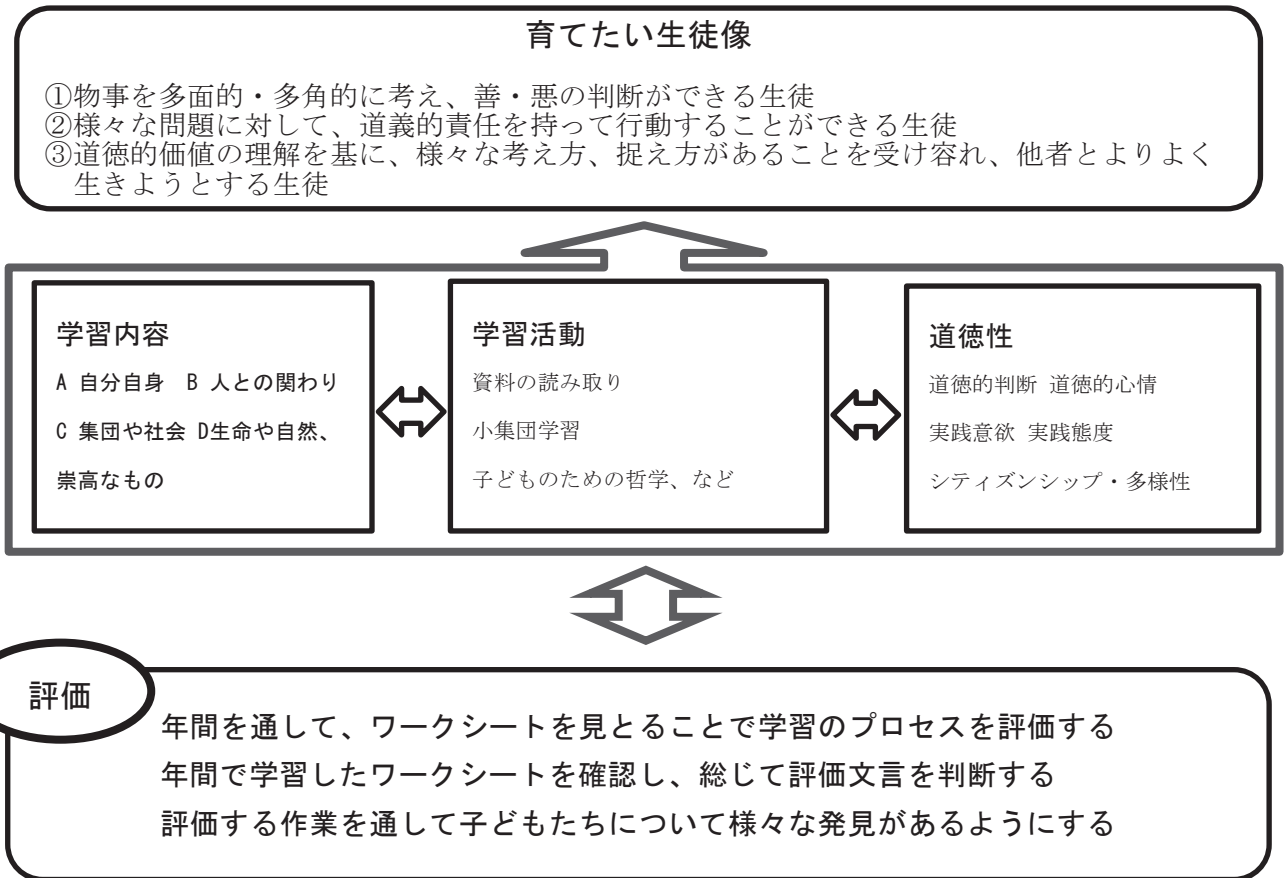
<https://doi.org/10.24546/0100487696>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487696>



1 「特別の教科 道徳」の教育目標



2 授業研究会での提案・研究協議のテーマ

道徳の授業づくりと教師の学び

指導要領の内容項目をどのように理解すればよいか
哲学対話を通して、教員と生徒が学ぶのはどのようなことか

《これまでの実践》
・異なった手法による道徳授業の実践
・p4cで何を学べるのかの探究

3 公開授業の紹介

子どものための哲学 philosophy for children の哲学対話

3年【特別の教科 道徳】
中川 雅道 教諭

【対話する問いは当日提示します】

生徒が設定した問いについて、日本学術会議の提言で示されている「子どものための哲学 philosophy for children」による哲学対話を実践します。

「特別の教科 道徳」 目標

		目標	・物事を多面的・多角的に考え、善・悪の判断ができる生徒 ・様々な問題に対して、道義的責任を持って行動することができる生徒 ・道徳的価値の理解を基に、様々な考え方、捉え方があることを受け容れ、他者とよりよく生きようとする生徒				
	学年	科目・分野等	A 基礎力 (道具や身体を使う)	B 思考力 (深く考える)	C 実践力 (未来を創る)		
			知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度		
			I 知識・理解	II 技能 (見つける力) (調べる力)	III 論理的・批判的・ 創造的思考 (まとめる力)	考える力	IV 自立・協同・創造 の力 (発表する力)
基礎期	1年	道徳 各教科 総合的な 学習の時間 特別活動 など	道徳的価値の理解 A 主として自分自身に関する事 B 主として人との関わりに関する事 C 主として集団や社会との関わりに関する事 D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関する事	周りの人たちの話をしっかり聞き、自分の意見を述べることができる。	周りの人たちの意見を意識しながら自分の立場を明確にすることができる。	問いに対して答える姿勢を持つことができる。	道徳性（判断・心情・意欲・態度） 道徳的な視点で自分の行いを見つめ、行動することができる。
	2年						
充実期	3年	道徳 公共 各教科 総合的な 学習の時間 特別活動 など		周りの人たちの話を踏まえながら自分の意見を述べたり、議論をしたりすることができる。	周りの人たちの意見をよく聞いた上で、様々な考え方・捉え方を受け容れたり、反論したりすることができる。	問い返しを繰り返すことで、考えを深めることができる。	倫理性（判断・心情・意欲・態度） 反省的な視点で自分の行いを見つめ、行動することができる。
	4年	ESD 各教科 総合的な 探究の時間 特別活動 など	各教科で登場する道徳的諸価値	基礎期、充実期の学習を様々な場面に活用することができる。	基礎期、充実期の学習を様々な場面に活用することができる。	基礎期、充実期の学習を様々な場面に活用することができる。	市民性・人間性（判断・心情・意欲・態度） 社会の中で他者とよりよく生きることができる。
発展期	5年	各教科 総合的な 探究の時間 特別活動 など					
	6年						

「特別の教科 道徳」における教育実践研究

1 教科の研究テーマ

子どものための哲学 philosophy for children の哲学対話

2 教科における教育実践研究の視点

(1) 育てたい生徒像

- | |
|--|
| ① 物事を多面的・多角的に考え、善・悪の判断ができる生徒
② 様々な問題に対して、道義的責任を持って行動することができる生徒
③ 道徳的価値の理解を基に、様々な考え方、捉え方があることを受け容れ、他者によりよく生きようとする生徒 |
|--|

中学校では令和元年度より「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」として教科化された。また、高等学校の学習指導要領において、「道徳教育や体験活動、多様な表現や鑑賞の活動等を通して、豊かな心や創造性の涵養を目指した教育の充実に努めること」とあるように、中等教育において道徳の重要性は高まっている。道徳教育は、学校のあらゆる教育活動を通じて行われるものであるが、その要となる「特別の教科 道徳」の充実は急務といえる。

「困っている人がいたら助けなさい」「きまりを守りなさい」「いじめをしてはいけません」等は、中学生、高校生にもなると、誰もがわかっていることである。しかし、人の行動はこの通りにいかないことも多い。良いことだとわかっている、行わないことがある、悪いことだとわかっている、行ってしまうことがある。つまり、道徳的判断力、心情、実践意欲が道徳的態度に結びつくとは限らないのである。

本校の道徳では、道徳的諸価値についての理解を基に、対話を通して自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考えることで、道徳的判断力、心情、実践意欲を高めていくと共に、読み物教材などを活用して、他者によりよく生きるための道徳的態度を育むことを目指している。

(2) 教科におけるグローバルキャリア人の構成要素

- | |
|--|
| A 基礎力…道徳的価値を理解することができる力・周りの人たちの話をしっかり聞き、意見を述べたり、議論を進めたりすることができる力
B 思考力…様々な考え方、捉え方があることを受け容れ、考えを深めることができる力・問い返しを繰り返すことで、考えを深めることができる力
C 実践力…他者によりよく生きることができる力 |
|--|

人の行いを1つとっても、その心の部分には様々な思いが込められている。その思いに気付くことは、他者との良好な関係を構築する上で基本的なことと考えている。

「特別の教科 道徳」が考えるグローバルキャリア人の具体像を踏まえ、グローバルキャリア人の教科における構成要素を4要素とした。

(3) 教科の各期目標

基礎期（1・2年次）

- ・道徳的諸価値についての理解を基に、道徳的判断ができる。
- ・道徳的な問題に対して、道徳的心情、実践意欲を高めることができる。

充実期（3年次）

- ・道徳的諸価値についての理解を基に、物事を多面的・多角的に考え、道徳的判断ができる。
- ・道徳的な問題に対して、道徳的心情、実践意欲を高め、道徳的態度へとつなげることができる

充実期（4年次）発展期（5・6年次）

- ・基礎期（1・2年次）、充実期（3年次）の学習を様々な場面に活用することができる。

(4) 目標達成のための学習内容と方法

キーワード： 子どものための哲学 philosophy for children シティズンシップ教育

道徳の時間の学習内容については、22の内容項目を偏りのないよう取り扱うようにしている。

子どものための哲学（Philosophy for Children：p4c）は、アメリカの哲学者マシュー・リップマンが教室で思考を実践することを目指して開発した教育プログラムである。このプログラムでは①教材・生活の中から自分たちで問いを立てて、②クラスのメンバー全員（教師を含む）で輪になって座り、③持っている人が話すというルールのコミュニティボールを用いて、④お互いへの敬意がある限りで問いについてどんな発言・質問もできるというセーフティを守って議論を進めていく。これは協同で思考することを目指すプログラムであり、生徒たちを発言へと強制することを求めているわけでもなければ、発言することのみを評価するものでもない。生徒または教師の問い返しによって議論を深め、道徳的価値にせまっていく。

(5) 目標達成のための評価方法例

〔評価のポイント〕

- ・年間を通して、学習のプロセスを評価する。
- ・年間で学習したワークシートを確認し、総じて〔評価基準例〕のどれに分類されるかを判断する。
- ・評価文言は簡素にし、評価する作業を通して子供たちについて様々な発見があるようにする。

〔評価文言例〕

道徳的価値について、他の人の意見をよく聞き、新しい意見を多面的・多角的に考えることができた。

道徳的価値について、自分の意見を多面的・多角的に考えることができた。

道徳的価値について、考えることができた。

「特別の教科 道徳」の評価例

相互評価の時間に、小集団でワークシートを読み合い、その結果をマークしている。

ワークシートを読み合うことで話されなかった意見も共有することができる。

以下の例は、すべて同一人物の対話ごとの考えの変遷である。年度の終わりにおおくりに評価する。

問い：嫌なことを伝えたいけれど伝えられない状況ではどう対処したらいいのか。（思いやり、感謝など）

対話前の考え	対話後の考え
たとえば仕事場で被害を受けて、立場的に言いにくいなど、伝えることができない状況だとしたら、電話などで相談できるところもあるけれど、自分の情報を知らな	身近な人や、親しい人だからこそ、直接言いにくいこともあると思うし、関係がこわれてしまうのがこわいし、見られるので、遠回しに伝えるやり方が
い第三者の方が言いやすいことも	良いと思う。嫌がらせの大きさに
あると思う。	もよるけど、どうしても伝えられないのなら、周りの大人に相談することが重要だと思う。

道徳相互評価（評価の参考にします！）（上下関係はありません）

① 道徳的価値について、考えることができた

② 道徳的価値について、自分の意見を多面的・多角的に考えることができた

③ 道徳的価値について、他の人の意見をよく聞き、新しい意見を多面的・多角的に考えることができた

① ② ③

周りの意見を聞いて考えが変わったと言えるので「道徳的価値について、他の人の意見をよく聞き、新しい意見を多面的・多角的に考えることができた」と評価できる。

問い：どうしたらみんな納得できる班分けができるのか（自主、自律、自由と責任など）

対話前の考え	対話後の考え
全員が納得することは不可能だと 思う。ある程度の妥協が必要。場 （最初は自由で決めたとして、後	私自身、小学校のときから、いつも立 場にいたけど、自然、学校のとき、全く 話したことはない。と組んで一番の友達に から、うまくいかなかった。人々の対応が よかったので、うんたむでいいと思う。 を全員で考えると良いと思う。でもみんなは仲良い人と組みた うんたむで嫌な思いをする人はいると思 うので、自由がいいという意見が9割の 全員で話し合いが必要。

道徳相互評価（評価の参考にします／①②③に上下関係はありません）

① 道徳的価値について、考えることができた。

② 道徳的価値について、自分の意見を多面的・多角的に考えることができた。

③ 道徳的価値について、他の人の意見をよく聞き、新しい意見を多面的・多角的に考えることができた。

① ② ③

p4cの中で意見を聞いて自分のこととして考えなおすので「道徳的価値について、他の人の意見をよく聞き、新しい意見を多面的・多角的に考えることができた」と評価できる。

問い：「イジメ」と「いじり」のちがい。（公正、公平、社会正義など）

対話前の考え	対話後の考え
イジメといじりは、それをさせた 側の気持ちによると思う。 （する側がイジメのつもりはなく、 いじりとしてやったことも相手か それによって傷付いてしまったら、 イジメになってしまうと思う。	「いじり」と思ってやったことも、それを し性格やコンディションによっては「イジメ」に なってしまうと思うし、「いじり」という根拠 念がある限り、それが「イジメ」にな ってしまうとはよくあると思った。 「いじり」と「イジメ」のちがいは、それぞれ 相手の受け取り方で変わっていくと思う。

道徳相互評価（評価の参考にします／①②③に上下関係はありません）

① 道徳的価値について、考えることができた。

② 道徳的価値について、自分の意見を多面的・多角的に考えることができた。

③ 道徳的価値について、他の人の意見をよく聞き、新しい意見を多面的・多角的に考えることができた。

① ② ③

相手が傷ついたらいじめであるという自分の考えについて深めているので「道徳的価値について、自分の意見を多面的・多角的に考えることができた」と評価できる

問い：未読スルーと既読スルーはどっちが悪いのか（友情、信頼など）

対話前の考え	対話後の考え
話している内容にもよると思う。 どちらも悪いときめつけることはでき ないと思うけど、私は未読スルー の方が不快ではある。享受着 いることが分かっているのに、既読 すら付いてくれないのは、自分の メッセージを開くのも面倒だと思 われている気がするから。	未読スルーと既読スルーも返信する のがめんどういことだし、話を 読めなくていいということだ。と思う ので、そういう気持ちがある中で あれば既読をつけてもつけて読め らせてくれた方が自分の中でモ ッケーを開くのも面倒だと思 われている気がするから。

道徳相互評価（評価の参考にします／①②③に上下関係はありません）

① 道徳的価値について、考えることができた。

② 道徳的価値について、自分の意見を多面的・多角的に考えることができた。

③ 道徳的価値について、他の人の意見をよく聞き、新しい意見を多面的・多角的に考えることができた。

① ② ③

未読スルーのほうが嫌だという考えを深めているので「道徳的価値について、自分の考えを多面的・多角的に考えることができた」と評価できる

(6) 教科実践研究の成果と課題

振り返りシートから思考の深まりが十分みられたことや、行為の理由を問い続けることで発言や振り返りシートの記述から道徳的心情にせまることができ、道徳的価値を理解する一助となったことは成果として挙げられる。評価を続けてきたことで、ほとんどの生徒が、他の人の意見を聞き、新しい考えについて述べるというかたちで意見を記述していた。今後、ループリックをさらに開発するなど、評価の観点については、さらなる検討が必要かもしれない。

第3学年2組 「特別の教科 道徳」学習指導計画

子どものための哲学 philosophy for children

指導者 中川 雅道

日 時 2024 年 2 月 11 日(日) 公開授業(14:20～15:10)

場 所 3 年 2 組教室

1 単元の設定にあたって

(1) 生徒について（「意識調査をもとに」）

本実践を行う3年2組の在籍生徒は41名。13回生は1年生の時から子どものための哲学 philosophy for children (= p4c) の対話を経験している。今年度は、道徳、国語、総合的な学習の時間などで年間を通してp4cを実践してきた。公開授業に先立ち、p4cをどのようにとらえているのかを知るために、アンケートを実施した。「子どものための哲学 p4c の対話の時間は好きですか?」「質問2：子どものための哲学 p4c で考えが深まると思いますか?」という質問について、下記の通りの結果となった。このやりかたの授業展開を好むかどうかよりも、考えが深まるほうの回答に肯定的な傾向が見られた。内容項目について議論し、多面的・多角的に考えを深めていく授業展開に、一定の成果が出ていると考えることができる。

＜アンケート結果＞（2023 年 10 月 10 日／対象：3 年生／回答生徒数：111 人）

質問1：子どものための哲学 p4c の対話の時間は好きですか？

とても好き 25名、どちらかといえば好き 61名、どちらとも言えない 14名、どちらかといえば好きではない 7名、好きではない 3名

質問2：子どものための哲学 p4c で考えが深まると思いますか？

とても深まる 36名、どちらかといえば深まる 62名、どちらとも言えない 7名、どちらかといえば深まらない 3名、深まらない 2名

(2) 学習方法について（「考え、議論する道徳」を実践するために）

道徳の価値が含まれる教科書教材を生徒たちに提示し、個人で問いを立てる。その後、小集団学習を行い、最もよい問いを小集団として一つ選び、クラス全体に提示した後に、多数決で問いの一つを選ぶ。議論する前段階で、問いに対する考えを記入し、整理したうえで対話に臨む。対話に際しては、より身近な問いとして探求することができるよう、問いを立てた人が自分の問いの意味や、問いを立てた理由を説明する。本時では、「子どものための哲学」(philosophy for children, p4c)の手法を取り入れて、生徒たちが自ら「考え、議論する」授業を行う。ファシリテータとなる授業者も含め、全員が輪の形になって座り、コミュニティボールとよばれる毛糸で作ったボールを用いて対話を行う（コミュニティボールは、学級開きの時間に自己紹介をしながら学級担任と生徒全員で作ったものである）。ボールを持っている人が話し、残りの人たちはその人の話を聞く。発言が終わったら、次に話したい人は手を挙げ、誰も手を挙げていないときには、誰かにボールを渡す。渡された後に、発言したくなければパスすることもできる。授業内で発言しない人もいるが、授業終了後のふり返りを記述したワークシートから各生徒の考えを知ることができ、ワークシートの考えの推移は評価の材料にすることができる。相互評価の時間を設定し、その際にどの評価の文言に適合しているのかを小集団で判断しながら、話されなかった考えについても共有する。

(3) 教材について

年度当初に教科書を提示し、どの教材を扱ってみたいのかについてのアンケートをガイダンスの時間に実施した（google form）。年度当初は、アンケートの結果を重視し、より多くの生徒が関心をもっている教材を扱い始めた。教科書教材以外では、沖縄研修旅行を見据えた内容、文科省のいのちの教育教材、性の多様性についての内容など、学年生徒に必要なだと判断されることについて、道徳の時間の中で扱った。

「考え、議論する」道徳を実現するための課題は、まだまだ山積している。

① 内容項目が多すぎるという課題

現行の指導要領では、22の内容項目を年間の授業の中ですべて扱うように求めている。「考え、議論する」道徳を目指すとして標榜しているが、内容項目が多すぎるため、十分に「考え、議論する」時間を取ることが困難である。

② 内容項目と教科書が現代社会に適合していないという課題

日本学術会議の報告で指摘されているように、指導要領で現代社会の価値である多様性への言及がない。権利概念が扱われないため、本来は権利の問題である「障がい」の課題が「思いやり」へと転化される教材が存在する。部活動の礼賛、部活動で病床に付す教員など、現代社会の教科書としてはふさわしくないと判断できる教材が教科書に掲載されている。

③ 教科書が「考え、議論する」プロセスを軽視しているという課題

教科書の各種教材は内容項目を伝えることに終始する読み物教材がほとんどである。複数の教材から考えを深める、写真やグラフを活用する、といった教材が不足している。読み物教材は文字数が多く、内容を理解するために時間を要する。

④ 「特別の教科 道徳」の授業を検討する場が排他的であるという課題

道徳の授業について発表すると「内容項目をすべて扱っているのか?」「評価はどうしているのか?」といった質問によって、新しい授業実践を委縮させる傾向が依然として残っている。

上記した課題について意見交換を行うために「礼儀」の内容項目を扱う。内容項目並びに教材について公平に議論する研究協議の場を設定したい。「礼儀」の内容項目は「礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとること」と表現されている。今回扱う教科書教材「言葉おしみ」では、礼儀の内容項目を反映して、「どういたしまして」「お先に」といった言葉を大人たちが「言葉おしみ」をして、重視すべき「礼儀」が現代社会に欠けていると感性的に書かれた教材である。

2 単元の構成

(1) 単元の学習目標

道徳的価値に関する問いについて議論を行う。この活動を通して様々な道徳的価値についての深い理解に達するとともに、道徳的判断力を養うこと、様々な葛藤を負いながらも道徳的価値に基づく行動を実践しようとする態度を培うことを目的とする。

(2) 単元の位置

生活の中で経験した様々な道徳的価値について振り返る機会となる。

(3) 単元のねらい

① 様々な道徳的価値について批判的に考察することで、互いに関連付け、自らの行動に反映させることができる。

② 資質・能力の育成の重点

A 基礎力 (道具や身体を使う)		B 思考力 (深く考える)	C 実践力 (未来を創る)
知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
I 知識・概念	II 技能	III 論理的・批判的・創造的思考	IV 自立・協同・創造の力
道徳的価値の理解。	周りの人たちの話をふまえながら自分の意見を述べたり、議論をしたりすることができる。	周りの人たちの意見をよく聞いた上で、様々な考え方や捉え方を受け容れたり、反論したりすることができる。	問い返しをくりかえすことで、考えを深めることができる。反省的な視点で自分の行いを見つめ、行動することができる。

充実期

道徳

(4) 単元の展開と評価（全 26 時間）

時	各時の主題	各時の問いと主な活動	各時のねらい(評価の場面)	評価の観点
	事前調査	p4cについての意識調査		
1時	ガイダンス	年間計画、授業展開、評価についての説明。	説明を聞き、理解する。	I III
2時	遵法精神、公德心など	沖縄研修旅行実行委員会の資料、説明などから問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
3時	p4c	前時に立てた問いの議論。「どうしたらみんな納得できる班分けができるのか」など。	問いについて話し合う。 道徳的価値の理解を深める。	II IV
4時	友情、信頼	教科書教材「情報モラルと友情」から問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
5時	p4c	前時に立てた問いの議論。「既読スルーと未読スルーどちらが悪いのか」など。	問いについて話し合う。 道徳的価値の理解を深める。	II IV
6時	公正、公平、社会正義	教科書教材「無実の罪」から問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
7時	p4c	前時に立てた問いの議論。「いじめといじりの違いとは」など。	問いについて話し合う。 道徳的価値の理解を深める。	II IV
8時	思いやり、感謝など	文科省「命の安全教育」の教材の内容を理解し、問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
9時	p4c	前時に立てた問いの議論。「嫌なことを伝えたいけれど伝えられない状況ではどう対処したいのか」など。	問いについて話し合う。 道徳的価値の理解を深める。	II IV
10時	相互評価	これまでに記入した、p4cワークシートを小集団で相互評価することができる。	道徳の学びを振り返り、評価する。	I II
11時	よりよい学校生活、集団生活の充実	性の多様性講演（認定NPO法人 Rebitより講師派遣）。	世の多様性について理解を深める。	I III
12時	郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度	教科書教材「島唄の心を伝えたい」から問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
13時	p4c	前時に立てた問いの議論。「伝統を引き継ぐ、新しい考えを生み出す。どちらがより良いか」など。	問いについて話し合う。 道徳的価値の理解を深める。	II IV
14時	感動、畏敬の念	教科書教材「ハッチを開けて、知らない世界へ」から問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
15時	p4c	前時に立てた問いの議論。「感動で何を得られるのか」など。	問いについて話し合う。 道徳的価値の理解を深める。	II IV
16時	勤労	教科書教材「好きな仕事で安定かなやんでいる」から問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
17時	p4c	前時に立てた問いの議論。「全然楽しくないホワイト企業か、めっちゃ楽しいブラック企業、どちらがいいか」など。	問いについて話し合う。 道徳的価値の理解を深める。	II IV
18時	国際理解、国際貢献	教科書教材「その子の世界、私の世界」から問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
19時	p4c	前時に立てた問いの議論。「土地ガチャと親ガチャ、どちらが深刻か」など。	問いについて話し合う。 道徳的価値の理解を深める。	II IV
20時	真理の探究、創造	教科書教材「新しいものを生み出すには」から問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
21時	p4c	前時に立てた問いの議論。「KPは必要か」など。	問いについて話し合う。 道徳的価値の理解を深める。	II IV
22時	家族愛、家庭生活の充実	絵本教材「大きな木」から問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III

23時	p4c	前時に立てた問いの議論。「金と愛情どちらが大切か」など。	問いについて話し合う。 道徳的価値の理解を深める。	ⅡⅣ
24時	礼儀	教科書教材「言葉おしみ」から問いを立てることができる。	問いについて話し合う。 道徳的価値の理解を深める。	ⅠⅢ
25時 (本時)	p4c	「学校生活において先輩、後輩という関係は本当に必要なのか」など	問いについて話し合う。 道徳的価値の理解を深める。	ⅡⅣ
26時	相互評価	年間のワークシートについて評価の文例と照らしあわせながら自己評価できる	道徳について観点にもとづいて相互評価する。	ⅢⅣ
	事後評価	ワークシート、ポートフォリオなどの評価		

(5) 評価の観点

Ⅰ 知識・概念 Ⅱ 技能 Ⅲ 論理的・批判的・創造的思考 Ⅳ 自立・協同・創造の力

3 本時の学習（25 時）

(1) 本時の主題「学校生活において先輩、後輩という関係は本当に必要なのか」の p4c

(2) 本時のねらい

①道徳的価値を多面的・批判的に考え、自分自身と対比させて反省的に自身の生き方を捉え直すことができる。

②資質・能力育成の重点

(学習指導要領の3観点と本校研究主題の資質・能力(3能力4要素)との関係を示す。)

A 基礎力 (道具や身体を使う)		B 思考力 (深く考える)	C 実践力 (未来を創る)
知識・技能		思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
Ⅰ 知識・概念	Ⅱ 技能	Ⅲ 論理的・批判的・創造的思考	Ⅳ 自立・協同・創造の力
様々な道徳的価値を踏まえて多面的・批判的に考え、対話の中で反省的に自身の生き方を捉え直すことができる。			

(3) 教材について・方法について

本時においてもこれまでと同様に、対話を主体として授業を展開する。

(4) 本時の展開

時	学習の流れ	生徒の活動	指導上の留意点・評価
0	導入 p4cを行う上でのルールの確認	○輪になって着席しておく。 ○「学校生活において先輩、後輩という関係は本当に必要なのか」という問いを板書しておく。	○着席順は毎回変更する。
5	問いについての議論	○問いの立案者から、問いの設定理由を説明する。 問いについて議論する。 ○議論の流れに応じて、進行する。 ○状況に応じて「学校生活において先輩、後輩という関係は本当に必要なのか」といった質問をする。	○ファシリテータとして振る舞う。 ○理由（なぜ～ですか？）・前提（その考えの前提はなんですか？）・推論（ということは、どうなりますか？）・例（例はありますか？）・反例（反例はありますか？）・真理（～ということは本当ですか？）など論理的な展開に留意して質問を考える。
45	まとめ	○本時のまとめをワークシートに記入する。	(評価)：評価資料(ワークシート) 道徳的価値を多面的・批判的に考え、自分自身と対比させて反省的に自身の生き方を捉え直すことができる。(Ⅳ)
50			

(5) 評価の目安

Ⅳ 自立・協同・創造の力：道徳的価値を多面的・批判的に考え、自分自身と対比させて反省的に自身の生き方を捉え直すことができたか。

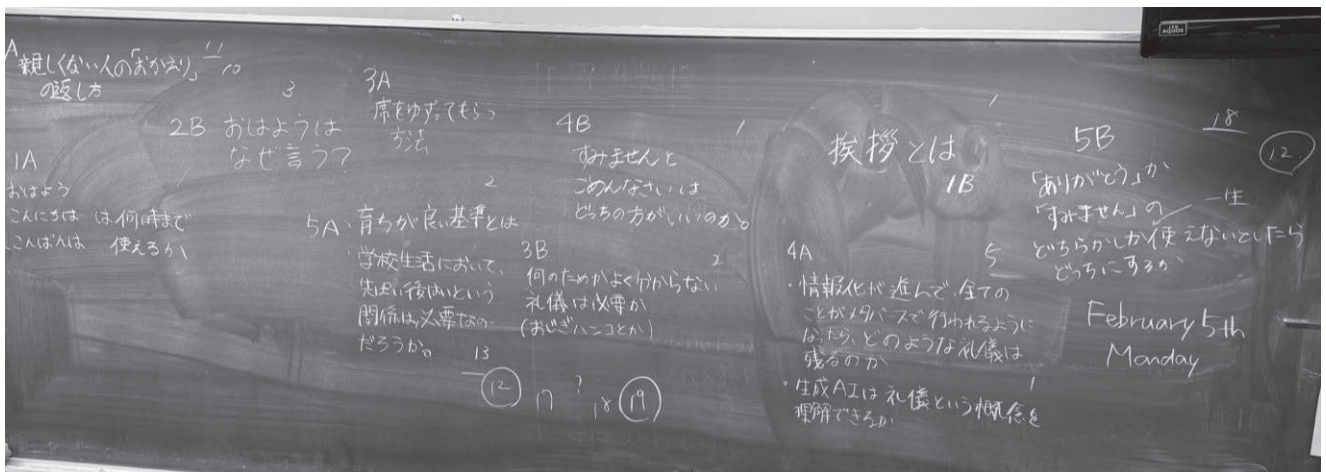
【資料】公開授業で使用するもの 『新訂 新しい道徳3』東京書籍、令和3年2月10日発行。

4 研究授業の記録及び分析

(1) 学習活動

教科書教材「言葉おしめ」と内容項目「礼儀」(礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとること)から個人で問いを立て、小集団の議論を経て、次のような問いが出された。

- 親しくない人の「おかえり」の返し方
- おはよう、こんにちは、こんばんは、は何時まで使えるか
- おはようはなぜ言う?
- 席をゆずってもらう方法
- 育ちが良い基準とは
- 学校生活において先輩、後輩という関係は必要なのだろうか。
- すみませんとごめんなさいは、どっちのほうがいいのか。
- 何のためかよく分からない礼儀は必要か(おじぎハンコとか)
- 挨拶とは
- 情報化が進んで、全てのことがメタバースで行われるようになったら、どのような礼儀は残るのか
- 生成AIは礼儀という概念を理解できるか
- 「ありがとう」か「すみません」のどちらかしか一生使えないとしたらどっちにするか



多数決の結果「学校生活において先輩、後輩という関係は必要なのだろうか」が選ばれ、授業研究会当日には盛んな議論が行われた。

(2) 学習評価

道徳教育について、内容項目に基づいた教育が行われているのかといった評価がなされる場合がある。健全な授業評価が行われるためには、以下の諸点に留意しておく必要がある。

評価についての大枠を確認しておきたい。「第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」(中学校学習指導要領、強調は引用者による)。道徳の授業の評価を考える際には、常にこの目標に立ち返る必要がある。評価については、次のようにも述べられている。「生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする」(同上)。計画的に行われた授業の中で、道徳性に係る成長の様子を把握することが評価なのであって、内容項目の理解を評価するわけでも、道徳的実践力を直接評価するわけでもないことに留意したい。道徳の時間には、指導の方向性を過信し、臆見に基づいて生徒評価を行ってしまうことがあること

にも注意したい。教員自身も、学習活動に参加し、生徒理解を深めることを目指すのが「特別の教科道徳」の方向性である。

授業計画についてももう少し確認しておこう。「各学校においては、**道徳教育の全体計画**に基づき、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動との関連を考慮しながら、**道徳科の年間指導計画**を作成するものとする。なお、作成に当たっては、第2に示す内容項目について、**各学年において全て取り上げる**こととする。その際、生徒や学校の実態に応じ、3学年間を見通した重点的な指導や**内容項目間の関連を密にした指導**、一つの内容項目を複数の時間で扱う指導を取り入れるなどの工夫を行うものとする」(同上)。道徳教育の全体計画は学校の教育課程のすべてに及ぶ、非常に大きな規模の計画であるが、それに基づいて、道徳の年間指導計画を作成することになる、計画的に進めることだけが、教育ではない。学習プロセスが教員の思い描いた通りになっていたとするなら、「考えない道徳」になっているということもあるだろう。**年間計画を立てる意味は、教員間で相互理解を図り、道徳教育の改善に役立てるためにある。**

内容項目は、各学年ですべて取り上げることとなっている。年間35時間を目安とする1単位の科目の中で、機械的に22項目すべてを行うことは、考え、議論する授業の方針に反している可能性がある。思考プロセスを重視するためには、大枠での「A自分自身に関わり」「B人との関わり」「C集団や社会との関わり」「D生命や自然、崇高なものとの関わり」をバランスよく配当することが一つの解決になる。**複数の内容項目はまとまりごとに連関をもつ。**関連に留意し、一つ以上の内容項目を同時に扱うことも十分に可能である。年間計画の進行の結果、主たる内容項目として扱えなかったものがあつたとしても、校内で共有し、3年間のうちにすべてを扱えるようにしておくということも計画的な教育のためには必要だろう。

以下では、授業分析に基づいて、教材「言葉おしめ」、学習指導要領の文言について考察してみたい。

(3) 授業分析

授業の様子については、参観者から、活発な議論に感動したという感想が多かった。その印象を裏づけているのは、教材から出された問いだけでなく、実際の対話の場面でも、生徒から**多くの質問が出されたこと**(先輩後輩をなくして実力主義にしたらどうなるんだろう、など)、また、単に相手を非難するのではない**異論が多く出されたこと**(問いに対して「仕方ない」と答えた人に対して、問いからずれているという指摘があつた、など)によるだろう。

対話の場面で、非常に興味深かったのは、礼儀という問題が中学校3年生にとっては社会的な「競争」とつながっていたことだった。社会の中で生まれる競争の中で生きていくために、礼儀を習得しておいた方が、生き抜くことができるといった趣旨である。代表的な発言は、次のとおり。

- 上下関係、社会でもし全体としてそういうのがなくなるなら、学校でもいらないと思うけど、いま会社とかで社長とかがいるなら、絶対それは上司とか、先輩になるから、全体としてなくなるならいらないけど**会社とかである中だったら、学校生活で練習し**といったほうがいいから。
- 自分は必要だと思って、何でかっていうと、社会に出る前に**学校っていうのは練習の場**なんで、先輩とか後輩とかで敬語を習っていくことで会社とか、社会に出た時に相手と話すときに敬語を使って話すっていう礼儀っていうのが身についていくから、先輩後輩っていう関係は必要なかなって思います。

それに対して、否定的な意見は次のようなものだった。

- 僕はまったくいらないかなと思っている派の人で、むしろ、なんでそんなに先輩、後輩という関係を作りたいのかわからなくて、年下であろうが、年上であろうが、**尊敬に値する能力**をもっている人には敬えばいいし、そうじゃない人にはそう接する必要性が僕は感じないかなと思います。よくわからないなと思います。

- 僕は必要ないと思ってて。尊敬する人って言うのは、自分が将来こうなりたいみたいな目標にするような人を尊敬することが多いと思うんですけど、そういう人って必ずしも自分からして目上の存在になるわけじゃなくって、たとえば、人柄とかでこういう人が尊敬できるとかあると思うんで、そういうので上司とか先輩とか目上の人を尊敬する風習があるのはよくないかなと思いました。

対話はその後、能力主義が本当に正しいのかという方向に進んでいった。

- 先輩後輩をなくしてみて、実力主義にしたら、それはそれでどうなるだろうと思った時に、それもそれでけっこう苦しいと思うんですよ。だって、普通に考えて、先輩後輩がなくなるってことは、逆に言ったら自分がそんなに頭が良くない遺伝子を持って生まれて、貧しい環境に置かれたらその時点で先輩後輩が関係ないってことは、その人が人生逆転するチャンスってほとんどないんですよ。だって、自分より遥かに裕福な家庭に生まれて、頭が良くてスポーツができて、そんな人たちが山ほどいる中で、逆に先輩後輩っていう関係をなくすっていうことは、それだけ弱者を、悪く言ったら弱者ですよ。そういう人たちを放っていくという方向になるんで。そう思うと、ある意味、言い方が微妙ですけど、平等とかを少しでも求めるならば、先輩後輩っていう関係がある方が、ある種、立場的に低い人にとってはその方がもしかしたらいいのかもしれないな、っていうのはちょっと思いました。

その後、問いに含まれる、事実として先輩後輩が存在することと、先輩後輩がいいかどうかを問う価値は別の問題だという方向に進み、対話は終了した。

(4) 成果と課題

考え、議論する道徳を実践するために p4c を行うことは、相互の質問を促し、異論を言い合う中で思考を深める自由な対話が行われるという点で、有効であると言える。

現在の教科書教材、学習指導要領はそういった実践をサポートするかたちで作られていない。以下、その理由を明示することで、今後の課題としたい。

① 教科書教材は子どもたちのリアリティから離れている

上記した授業の様子から言えることは、子どもたちにとって実は礼儀という問題は、社会から評価されるリアリティにつながっているということである。教科書教材は、高齢の成人がそれより年若い成人たちに向けて書いた文章であり、子どもたちの思考を触発するかたちでは書かれていない。考え、議論する道徳を推進するためには、対話的な教材が多数出版されていることを参考にして（河野哲也『対話ではじめる こどもの哲学—道徳ってなに？』童心社、2018 年など）、実際に子どもたちが対話し、考えを深めている教材にすべきである。

② 学習指導要領の文言は考え、議論する道徳をサポートするかたちで書かれていない

上記した教科書教材が書かれる背景には、学習指導要領の文言の問題がある。「礼儀」の内容は、「礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとること」と書かれているが、ここだけ取り出したとするなら、教科書教材は相応しいということになる。しかし、注意深く学習指導要領を読むならば、その内容に基づいて考えを深めることが学習であると定められており、道徳的実践力を授業内で評価するものではない、と理解できる。礼儀という項目を、今後内容項目として認めるとしても、すべての内容項目の書き方の文末を「について考える」といった表現に改めるべきである。

内容項目の検討、手法についての理解が進まないことは、やはりオープンな姿勢で道徳について議論する場がないことに起因している。私たちは、今一度、道徳とは何なのか、教育とは何なのかといったすぐには答えが出ない問いについて、子どもたちと同じ立場から考えていく姿勢が必要なのである。